

ある日のスーパーで

【中学年 2・2】

体験を取り入れた指導

(1) 主題名 思いやりの心で〔2・2〕 関連項目〔1・4〕

(2) ねらい 相手のことを思いやり、親切にしようとする心情を育てる。

(3) 資料名 「ある日のスーパーで」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 親切にしてもらった経験を発表する。	困っているときに、親切にしてもらいうれしかったことがありますか。	親切にしてもらったことを思い起こすこと、価値への方向付けをする。
展開	2 資料を読み、話し合う。 3 男の人に対するふみかの気持ちを考える。	男の人にことわられたとき、ふみかはどんなことを思ったでしょうか。 ・せっかく手伝ってあげようと思ったのに。 ・何がいけなかつたのかな。 商品を見上げて困っている男の人を見て、ふみかはどんな気持ちになつていったのでしょうか。 ・どうしようかな。 ・またことわられたらいやだな。 ・思いきって声をかけようかな。	状況をおさえられるように車椅子、駐車場のマーク等を提示しながら資料を読む。 高さが感じられるように車椅子に実際座ってみる。 書く活動を取り入れ、主人公の気持ちをじっくりと考えられるようにする。
開拓	4 にっこりされた後のふみかの気持ちを考える。	男の人に、にっこりとされたとき、ふみかはどう思ったでしょう。 ・親切にしてよかったです。 ・喜んでもらえてうれしい。	親切にできた満足感を主人公の心情に沿って考えさせる。
総括	5 今までの自分の生活を振り返る。	相手のことを考えて親切にしたことありますか。そのとき、どんな気持ちになりましたか。	自分の生活を振り返ることで、そのときの充実感や喜びに改めて気付くようにさせる。
終末	6 教師の説話を聞く。	・相手の気持ちを考えて行動できたらいいな。	今後への意欲を高めることのできる話をする。

ある日のスーパーで

「わあ。いっぱいだね。なかなか、車を止めるといろがないよ。」

今田は日曜日、ふみかは、お父さんと買い物にきています。でも、駐車場（ひまつじやじょう）はいっぱいでなかなか車を止めるといろはありません。

「あつ、お父さん、あいてるよ。それもエレベーターの近く。」

「本当だ。でもだめだよ、あそこは。」

「どうして？」

「よく見て、車椅子（くるまいす）のマークがついているだろ？ あそこは障害のある人たちのためのスペースなんだよ。」

ふみかたちが車を止めたのは、入り口からずいぶんはなれたといろでした。店内に入ろうとしたとき、さつきの駐車スペースに一台の車が止まりました。運転せきから一人の男の人が車椅子につづりうつをしています。ふみかは近寄つて、車椅子が動かないようにと手を差し出しました。

けれども、

「一人でできるから、さわらないで。」

と、その男の人によるとわられてしましました。

（せつかく、手つだつてあげようと思ったのに・・・）不満げなふみかの前で、その男の人は、エレベーター室の前の段差（だんさ）もかるく乗りこえてエレベーターに乗つていきました。

「もう、ずいぶん車椅子になれている人みたいだね。ふみかがさわって車椅子が動くのがわかったんじゃないかな。」

お父さんがなぐさめてくれました。

ふみかが買い物をしていると、さつきの男の人がちんれつだの方を

見てこまつたよつな顔をしていました。ときどき、きよのきよあたりを見回しています。

（品物がとれないんだ。店員さんもいないみたいだし・・・。手つだつあげようかな・・・。でも、またことわられるかもしれないし・・・。）

ふみかは声をかけよつがどつかまよつてしまいました。

しばらく男の人を見ていたふみかは、思ひきつて

「どうしたんですか。お手つだいしましょつか。」と声をかけました。

「ありがとうございます。あの上のシャンプーがほしいんですけど、取つていただけませんか。」

シャンプーを手わたすと、男の人は、

「本当にありがとうございます。さつきの女の子だね。おじさんは車椅子を使つよつになつて、ドアのいじはとにかく一人でやるのを決めこんだだよ。でも、どうしても自分一人でできなこともあるんだよ。本当にありがとうございます。声をかけてくれてうれしかつたよ。」

と、こういつしてきました。

活用に生かすための実践報告

「ある日のスーパーで」

1 主題の設定

- ・一口に「親切」といっても、なかなか実践に移すことはむずかしいものである。そこで、自ら進んで親切にできる子どもにとの思いを込めてこの資料を作成した。また、真の親切や思いやりは、相手の身になって真心をもって行うことも合わせて理解させることができたと考える。
- ・障害のある方や高齢者とのふれ合いが予定されていれば、それらの活動と関連付けて本資料を扱うのが効果的だと考える。

2 指導過程の工夫

- ・終末について、指導案では教師の説話としているが、障害のある方や高齢者等の協力が得られれば、ねらいにつながる話を聞いていただくとよいと思う。
- ・導入については、「心のノート」の活用（P 38. 39）も考えられる。

3 発問の工夫

- ・主人公の心情にそって発問を構成した。中心発問では、困っている男の人を前にし、「声をかけるべきかどうか」という主人公の葛藤について、書く活動も取り入れて、しっかりと一人一人に考えさせてほしい。
- ・また、一般化については、学級の児童

の実態をよく把握し、これまでの体験を引き出し、今後の実践につながるような発問を工夫してほしい。

4 児童の反応

【男の人を前にした主人公】

- ・「声をかけたいけど、また断られると恥ずかしい、どうしようかな。」
- ・「今度は本当に困っているようだし、放っておけない。」
- ・「車椅子は上手に乗れても高いところの物はとれないんだ。でも、わたしなら取ることができるので声をかけよう。」
- ・「お店の人を探してこよう。」
- ・これまでの障害のある方や高齢者とのふれ合いの中での経験を想起しながら、考えることができた。

5 実践者からの一言

- ・学校行事として、車椅子ダンスをされている方との交流会が実施されたので、それと関連付けて道徳の時間の授業を行った。また、授業後、特別養護老人ホームへの訪問を実施した。体の不自由な高齢者に対して、相手の立場に立って接しようとする態度が随所に見られ、よい実践の場とすることことができた。

（警固屋小学校 胡 敏和）